

## 追悼 序

立春もすぎ、ふたたび二月中旬が訪れて参りました。恒例の経済学部第一期入学試験のはじまりです。本年は志願者数三六六四名、昨年より一五五〇名増となりました。実に七三％アップですから、正に狂乱物価なみというところでしょうか。こんな風にいい出しますと、どなたかがいわれたように、天下国家や世相の乱れをたえず慨嘆され忿懣やるかたなかった山崎三郎先生のお叱りを受けるかもしれません。しかしながら、私が生前お元気な山崎先生に最後にお目にかかったのが、昨年二月一三日経済学部第一期入試当日だったので、御寛容頂けるでしょう。

駅前から村田の店を右折し、旧郵便局を左折、さらに新郵便局とバリジャンの工事を左折したところで、山田俊雄教授をして「風の様につき進む歩き振り」といわしめた山崎先生の後姿を発見しました。そして、あつという間に銀杏並木を右折して、大学正門にすい込まれて行かれたようでした。私が葡萄酒の十字路に達した時には既に先生のお姿をとらえることができませんでした。老いは足から来るとか、あの時の山崎先生は老いを全く感じさせない闊達そのものであったと、一年たった今もはっきりと思ひ浮べることが出来ます。あのようにお元

## 追悼序

気な山崎先生がその後久我山駅で倒れ、それから一カ月後の第二期入試時には久我山病院に入院され、さらに昭和四九新学年度に入ってから虎の門病院に移られ、手術後四月二八日に急逝されるのは、全く信じられない気持ちで一杯です。手術後、虎の門病院へお見舞に出向いた折は、遂にお目もじが叶いませんで、四月三〇日堀の内における無言の永のお分れが文字通り最後となりました。

山崎三郎先生は昭和四四年三月東大教養学部を停年退官されてから、同年四月新学期と共に本学経済学部就任され、必修の数学を担当されただけではなく、快く一年のクラス担任まで引受けられました。丁度、三期九カ年に及ぶ内田前経済学部長の後を受けて、若輩の私が学部長に就任した年に当ります。昭和四三年秋、山崎先生の御紹介がありました折、昭和十年代に旧制成城高校で教鞭をとられていたこと、それからホグベン「百万人の数学」の邦訳者であること等、成城や東大出身でない私どもにも何となく親しみを感じさせる方でした。先生の一見活動家的風手は気安く近づき難いものがありました。専門外の私には先生御専攻の Barach 空間の base の問題は、質問のための基礎さえ持ち合わせませんでした。抜群に良き数学教師というお噂で、学生にとってはいうまでもなく、私ども理論経済学専攻の者にとっても、良き師がえられたものと、心ひそかに期待していた次第です。いつだったか、講師控室での雑談の折、「君はいつ数学を勉強したのですか」と問われて、学生時代むしろ独学で体系的勉学の時期を経ていない私は、思わず赤面したことがあります。先生の思いやりというのでしょいか、「えらいものですな」とお褒めの言葉を頂いて二度赤面したことを覚えています。私には激励と強い鞭撻のお言葉と思えます。

いわゆる近代経済学は一八七〇年代のワルラス、ジュヴォンズ、メンガーによる限界革命からその後約半世紀

を経て巨視経済学の体系化と共に、質的分析から量的分析へとシフトしました。この変化は文章的经济学から数理的经济学へ、そして計量経済学 *Econometrics* の確立へといい直してもよいでしょう。数理経済学は経済モデルの設定に数学を利用するものであり、計量経済学は経済理論の統計的確定、理論の検証、予測という幅広い分野で数学が利用されます。こうなりますと、経済学における数学の単なる利用とか応用を超えてむしろ科学の総合性をはつきりと浮び上ってくるでしょう。本学における山崎先生の存在意義と先生への期待は実はこの点にあった、といつては独りよがりすぎるでしょうか。

先生の本学部における在職期間満五年、先生の全人を理解し吸収し尽すには余りにも短かかったようです。この特集号を献り、謹んで御冥福を祈念致します。

昭和五〇年二月一三日

成城大学経済学部長 松坂兵三郎